

Flow Analysis Xに参加して

Report on Flow Analysis X

山口東京理科大学 浅野 比

2006年9月3日から8日まで、ポルトガル第二の都市、世界遺産にも登録されているポルトで Flow Analysis X（開催地：Le Meridien Park Atlantic Porto）が開催された。オーガナイザーを務めたのは Jose Luis Costa Lima 先生(ポルト大学)で、彼の研究室の学生さんが大会を運営してくれた。

冒頭から言い訳になるが筆者は今回コブ（妻）ありの学会参加となったためずうずうしさと食欲だけは人一倍あるが、英語ましてやポルトガル語などはまったく出来ない妻を一人置いては行けず、学会にあまり参加することができなかった。したがって、ここでは観光を中心とした報告記となることをお詫びさせていただきたい。学術的な内容に関しては横山先生（岡山理大）が“ぶんせき”に報告されるということで、そちらをご覧いただきたい。

今回、日本からは、委員長 酒井忠雄先生（愛工大）、本水昌二先生（岡山大）、善木道雄先生（岡山理大）、小熊幸一先生（千葉大）、菊地 正先生（山口東理大）、中野恵文先生（鳥取大）、八尾俊男先生（大阪府大）、角田欣一先生（群馬大）、板橋英之先生（群馬大）、長岡 勉先生（大阪府大）、手嶋紀雄先生（愛工大）、横山 崇先生（岡山理大）、平田静子氏（産総研）、樋口慶郎氏（小川商会）、筆者および同伴者7名の計22名が参加した。

日本からポルトへの直行便がないということで、フランス経由（または韓国経由）で皆さん向かわれたようであった。筆者も2日にパリ経由でポルトにむかった。ポルトの空港に着いたのは夜の10時過ぎで、慣れない長旅に疲れながら荷物の受取所で預けたトランクとポスターを待った。トランクは縛っていたベルトがなくなっていたものの手にすることが出来たが、ポスターが待てど暮らせど一向に出てこない。30分ほど待ったが出てこず、別の便の荷物の番になってしまった。仕方なく空港内の Lost&Found という看板を見つけ、荷物が届いていない旨と宿泊ホテルの連絡先を伝えホテルに向かうこととした。このままでは発表できないのでは！？と期待ではなく心配しながらメトロでホテルへ向かった。結局ホテルには夜中の12時ごろ到着し、疲れていたこともありすぐに休んだ。聞けば荷物が届かなかったのは筆者だけでなく、Hansen 先生、Zagatto 先生、角田先生も同じ境遇に合われたとのことだった。筆者はまだ運良く？ポスターだけであるが、着替えなどが入ったバッグが届かない角田先生はご苦労があったのではないかと思います。（実際先生はスーツが届かず、カジュアルな服装で講演された。）



3日の夕方ごろ会場である Le Meridien Park Atlantic Porto で受付をすませ、ポスターが届いていないが明日もしかしたら届くかもしれないのでよろしくお願ひしますと伝えた。このときは、明日には届くだろうと気楽な気持ちでいた。

4日、筆者発表の日であるが空港からの連絡はなくポスターが届かず発表が出来ない事態となった。これはいよいよピンチだと思ったが、運良く USB メモリにポスターのデータを持ってきたため、酒井先生に相談したところ Lima 先生にどこかプリントアウトするところはないかと聞いてくださり、町のプリントアウト屋さんを紹介していただいた。その際、Lima 先生のところの学生さんにお店まで連れて行っていただき、プリントアウトの手続きも全てやっていただいた。妻には内緒であるが、美人で知的な異国の女性と少しの間ではあるがデートが出来て、石畳の歩きづらさも忘れるほどとてもうれしかった。Lima 先生のところの学生（女性）さんは皆さん優しく、勘違いを起こさせるような方ばかりだった。（もちろん男性の学生さんも優しくあったが勘違いはしなかった）このように、酒井先生、Lima 先生のおかげで無事ポスター発表をさせていただく

ことができた。ポスター発表の後、ホテルに戻るとフロントに見覚えのあるポスターケースがあった。その日、お昼ごろ空港から届いたそうである。発表はもう終わっており「今さら遅いよ!!」と思いつつも、内心ではケースを弁償しなくてすんだという安堵の気持ちが大きかった。先日のクリスチャン先生を囲む会で荷物が届かなかったという話題が挙がり、「€27 のプリントアウト代なんてせこいこと言わずに、発表が出来ないかもしれないという心理的なダメージを被ったということでエールフランスを相手取り訴訟を起こしたら?」というアドバイスを手嶋先生から頂き、A4 などでもポスターの保険を作っておかなかった自分が悪いのだと思っていた筆者は考えを改めた。Dasgupta 先生の研究室への留学で、研究だけでなく訴訟大国アメリカならではのフィールドまで勉強されてきたのだと手嶋先生の食欲さを感じた。

5 日は午前にも本水先生のご講演があり、午後に本水先生と酒井先生が座長をされ、日本での FIA の研究、発展、普及にご尽力を注がれてきた石橋先生を偲ぶセッションが行われた。本水先生がプロジェクターにて石橋先生の御略歴や 1991 年に熊本で開かれた Flow Analysis V での懐かしい写真を Who is this? というコメントとともに披露された。若かりしころの Ruzicka 先生、Hansen 先生、本水先生、酒井先生、樋口氏が映し出されると会場内は笑いに包まれた。みなさん 15 年も経過すると風格、いい意味での老いを増していらしやり、しみじみと時の流れを感じさせられたが、Trojanowicz 先生だけは時の流れを感じさせなかった。その後、長岡先生、角田先生、小熊先生、手嶋先生による日本勢のご講演が立て続けにあり、夕方のポスター発表で学会 3 日目は終了した。

6 日はカンファレンスツアーのドウロ川クルーズへ向かった。ツアーは朝食、昼食、ワイナリー見学などが含まれ一人€50 と非常にリーズナブルであった。バスにてダウンタウンにあるドウロ川の船着場まで移動したが、道中の古い町並みは世界遺産にも登録されているだけあって、非常に素敵であった。朝方は霧がかかり天候が心配されたが、日中になると日差しも痛いほど強くなり非常に良い天気となった。また、紫外線が強いため対策用のクリームが用意され、船長らしき人がちゃっかり帽子を販売していた。9 月初旬ではあったが非常に気温も高く、飲み物がすすんだ。Ruzicka 先生がアイスを食べているのに触発され妻も同じアイスを食べた。川岸に建てられた古いワイン工場やぶどう畑、教会など美しい景色の中、ゆっくりと静かな時間を過ごした。ドウロ川は古くからポートワイン運搬のための重要な交通路であり、水量を保つために各所に設けられた関が、通るたびに稼働するのは圧巻だった。ドウロ川クルーズを終え、ワイナリー見学では有名なポートワインを頂いた。筆者は下戸であるため独特の甘さのあるジュースの



ようなポートワインは非常に飲みやすかった。その後、列車にてこれまた美しい景色の渓谷を沿う形でサンベント駅へ向かった。サンベント駅は大きな駅で、多くの人でごった返していた。駅構内は壁が全て白地に青の壁画で美しく飾られているポルトガル独特のタイル“アズレージョ”が使われていた。その後バスにてホテルまで帰った。

7 日は午前にも酒井先生のご講演があり、夕方のポスター発表終了後、カンファレンスディナーとなった。ディナー会場はドウロ川とポルトの町並みを見下ろせる高台にあり、夜景のすばらしいところであった。もちろんここでもポルトワインが振舞われたが、I 先生は赤ワイン、白ワイン、ビールと 3 種類のアルコールを並べ、体内へオールインジェクションされていた。溶液の消費量は昨今のフローアナリシスとは逆行しているようであった。メインは淡白な鰯で

あったが、クリームソースのかかったかなりボリュームのあるものだった。食事を終えると誰からともなく外に出始め、夜景を眺めながら、談笑、写真撮影が始まった。本水先生の奥様の「あなたもいらっしゃい」の優しいお言葉に、ハイスサイエティな方々との写真にうちの妻も一緒にさせていただき、なんとシャッターを押してくださったのが本水先生というかなり贅沢なシチュエーションで美しいポルトの夜景をバックに思い出に残る一枚を撮っていただいた。筆者は次の日の朝9時の便で帰る予定だったので、早めに帰りのバスに乗り込んだが、バスは満員近くならないと発車しないため、会話が弾んでなかなか帰ることが出来ず、ホテルに着いたのは12時をまわっていた。

8日は午前の口頭発表のみで、6日間の学会は終了した。また、日本人参加者の一部は、会議終了後、Dr. Rui Lapaの案内でオーガナイザーの Lima 先生の研究室を訪問したとのことである。次回の Flow Analysis XI はスペインのマヨリカ島で開催される。

ポルトでは夜中12時ころメトロに乗ったり、ホテル周辺を歩いたが比較的安全な町であるという印象を受けた。また、学会はもちろん、対応してくれたホテル、カフェなどのお店の人也非常に親切であり、海外＝危険、不親切の固定観念がなくなった。異国の文化に触れることは非常に得

るものが多く、大いに刺激になった。実際、妻は今回のポルト訪問を機にいつまで続くか不明だが英会話を習うようになった。

末筆ですが、今回の学会で申込から発表まで大変お世話になりました酒井先生、本水先生、さらにホストであるポルト大学の Lima 先生及び学生の皆様方に心より感謝申し上げます。

